

**A** ここで「問い」をつくっている。

5月8日 発表回

図書館で

自由 { 守らないと...めいわく (××)  
ない...区別がつかない (ー)  
あるかない

約束 X 不自由 { 守ると...よい気持ち (^^)

学校の図書館 ← 同じ図書館 → 中央図書館

しずかに! あり・にぎやか (注意書き) なし・しずか

ルールでさえる (ルール) 人に言われて (おひき) 自分から (おひき)

きまり (きまり) 自分で (自分で)

おしつけ (おしつけ) 自分で決めている (自分で決めている)

きまり=不自由? (きまり=不自由?)

正しいルールを自分で決めることできる (正しいルールを自分で決めることできる)

**B** 2つの図書館を比較させることで、双方の特徴やよさが見えてくる。

**C** 黒板に図や記号で示すことで、思考が整理され、新たな気づきが促される。

### 授業を活性化し、子どもたちに返すための3つのポイント



道徳授業は、あらかじめ分かっていること、決められていることに子どもたちをあてはめる(矯正)することを目的としてはいない。かといって、好き勝手にさせるわけでもない。自由に考え、行動することができるための人間性を身につけさせることが重要である。そのため授業でできることは何か。

子どもたちの「よくありたい」「自分の意志で自由に生きたい」という人間的な欲求を、高いレベルで実現させるための3つのポイントを紹介したい。

#### ①子どもの発言から「問い」をつくる

「きまりはなぜ守らないといけないのでしょうか。」授業の冒頭に、このような投げかけを行います。子どもたちは、これまでの既習事項、体験から様々な考えて発言するでしょう。

- きまりはなぜ守らないといけないのでしょうか。
  - 守らないと迷惑がかかるから。
  - きまりがないとよいことと悪いことの区別がつかない。
  - きまりを守るとよい気持ちになる。
  - きまりがないと、自由な気持ちになって危ない。
- ※これはまだ「知っているつもり、分かっているつもり」の「知識」に過ぎません。ここですかさず問い返しを入れます。
- きまりがないのが自由ということは、きまりがあるのは不自由ということですね。「きまり=不自由？」(板書 A)
- うーん、そういうことになるけど、何かちょっと違う気がする。

※ここから本当の意味で自分の頭で考え始めます。このような子どもたちの中に生じる問題意識が、本時の方向性を決めると言っても過言ではありません。

#### ②比較する発問

子どもたちの発言にちょっとツッコミを入れるだけで、「理屈ではそうだけどちょっと納得いかない状態」に陥ります。そこで「シェン」とならない知的たくましさを育てたい。「え、どういうことだろう。考えたい。」と思う問題意識こそが、問題解決的学習の第一歩なのです。

- では、教科書を読みながら考えましょう。
- ※問題意識をもちながら教材を読むと、教師からの投げかけがなくても発見や気づきが出てきます。
- 学校の図書館と中央図書館との違いは何でしょう。
- ※子どもたちの問題意識を刺激しながら、このような「比較する発問」が有効です(板書 B)。
- 「学校の図書館」には注意書きがあるけれどにぎやか。「中央図書館」には注意書きがないけれど静か。
- 「学校の図書館」はきまりを押しつけている。「中央図書館」は自分たちで分かっている。
- 何が分かっているのかな。
- 静かにしないと迷惑がかかるし、自分も静かに本を読みたい。

#### ③板書を効果的に活用する

- なるほど、それでは、「中央図書館」には注意書きがないということは、きまりがないということなのかな。
- いや、ある。
- どこにあるの？
- 自分たちで分かっている……。
- 自分の中かな。
- 「学校の図書館」は自分の外。
- 分かった！きまりを押しつけられて守らされるのは不自由だけど、きまりを自分たちで分かって守ろうとするのは、不自由じゃない。
- そうか、なるほどね。ということは、きまりを守る、守らないの世界にはいくつかのステップがありそうだね。
- ※子どもたちの発言を受けながら、黒板に階段図を描いてみました(板書 C)。このような図式化は、子どもたちの思考をサポートし、発展させるための重要なツールです。

【使用した教材】  
4年 「図書館で」 (光文書院)